

ろくべん館だより Vol.43

『シズさんのひそかな愉しみ』

シズさんとは十年ほど前に初めて会った。その頃、シズさんは飯田紬の織り子をしていて、素敵な紬を織っている人がいるよと教えてくれた友人の紹介で、訪ねて行ったのだった。シズさんの機織り部屋に行くと、草木染のさまざまな色の糸が一本ずつ細やかに織り込まれ、やわらかな春の色のグラデーションが機のうえに載っていた。

シズさんは九州出身だそうだが、国体の登山競技の選手だったことが縁で、信州にやって来た。登山を通じて下伊那出身の旦那さんと知り合い、彼の家に嫁いできた。最初に会った頃は、四人の子を育てている真っ最中だった。田畑の仕事をしながら、家事をこなし、機織りをする働き者のシズさんだった。

その後お互いに会う機会もないまま年月が経ったが、今年になって、シズさんが写真の展覧会をするという案内が届いた。飯田のギャラリーで『田の草、野の草、ただの草』というテーマでの展示だった。

会場を訪れてみると、最終日だったせいか、狭いスペースは混雑していた。

壁いっぱいには草花の写真が貼られている。入口には、春一番の畔の草。おなじみのホトケノザ、オオイヌノフグリ、ハコベの三色はにぎやかだ。蔦の蔓の若い緑。スマレの青紫にネコノメソウやミツバツチグリの黄色の花。おや、めずらしい、ショウジョウバカマの桃色の花もある。植物だけじゃなく、頭に土を載せたまま顔を出したアマガエル、水温んだ用水路に現れたサワガニ。コケもシダも、春の田の畔は生命力が湧き出している。それらの生き物たちを、レンズの手前側から見つめるシズさんのうれしい眼が写り込んでいるようだ。

季節が移るとともに、今では田んぼの畔にめったに見ることのなくなった花が出現する。タツナミソウ、フデリンドウ、センボンヤリのほか、名前も知らないような、見たこともないような花々の写真が並んでいる。「こんな花、見たこともないよ」という言葉に、「それは、見たことなくても不思議じゃないよ」と、シズさんが声をかけてくれた。

というのも、日中この花を見ることはないのだそうだ。夕方から開き始め、夜の間は咲き続けるが、朝の日射しが当たると閉じる花なのだ。シズさんも、蕾は目にしても開いた花に出会うまで何年もかかったという。ある雨の日に、星形の小さな黄色い花を見つけたのだと教えてくれたが、その時のシズさんの感動を想像せずにいられなかった。自分でも家に帰ってから図鑑を見ると、この花は「準絶滅危惧種」と書かれていた。

シズさんは、珍しい花だけを育てているつもりはない。どの植物もシズさんが嫁入ってきた当時から、この田んぼの畔にあったものなのだ。旦那さんの家の人たちが、それまで愛でてきたものらしい。それが絶えないように、毎年毎年、畔の草を刈るときに気をつけながら残してきたのだという。もちろん、「そりゃあ最初はものすごく手がかかった」そう

だ。「今の私の課題なんだけど、畔の草刈りは三回で済むはずで、大事なはそのタイミング。あるものは一度刈られてしまうと、その年は花が咲かない。しかしあるものは、二度三度刈られても花も実もつける。もっとも繊細な植物に照準を合わせて、草を刈るタイミングを計っている」というはなし。

シズさんにとって、植物に優劣はない。絶滅危惧種だからという理由で、特に大事に育てているのではない。田畑の仕事に行くシズさんにとって、目の前で繰り広げられる命の営みが、どれもかけがえのない喜びなのだ。展覧会に来るお客さんの中には山野草の愛好家も多く、「どこに行ったら見られるのか?」とか「盗掘されないか?」と聞かれるのだが、そんなことは考えてもいなかったとシズさんは言った。

今回の展覧会をやろうと決めるまで、シズさんは迷った。世間に自分のやってきたことを知らせたいとか見せたい、という気持ちはシズさんの中になかったからだ。自分がひそかに見守ってきた世界を、これまで友達に見せることはあっても、共感を得たかったわけでもない。ただ、自分が二十数年してきたことを、自分自身が少し客観的に見てみたくなかったのかもしれない。

展覧会が始まってから一日目、二日目は人と話をするのも怖かったと言った。それが一週間の会期も終わりが近づくとつれ、次第に「ああ、私にもまだ伝えたいことがあったんだ」と気がついたようだ。それは予想以上に反響が大きかったことも、シズさんの心に変化をもたらしたのだろう。

昭和三〇年代にはそこかしこに見られた風景が、生産の増大や効率の良さを求めることに一生懸命になっている間に、いつのまにか消えていた。こうやって私たちが失ってきたものを、シズさんはひとり静かに守ってきたように思える。

シズさんの家では花卉栽培もしている。おもにリンドウやケイトウなどの盆花を出荷している。その花の上にも、カエルたちが表情豊かに写真に納まっている。「こんな生き物の世界を見ていたら、殺虫剤が撒けなくなってしまった。その結果、たとえばこれまで500だった出荷が300に落ちたとしても、気分的にはすごく楽になった」のだそうだ。収入が減った分、シズさんはパートに出ているが、「自分はそれで満足している」と言った。

生き物の生命力にむせかえるような夏、種の保存に懸命な秋、そして迎える枯れた冬。どの写真もシズさんは低い目線で捉えている。地べたを這うように、生き物たちの世界に入り込んでいる。シズさんがひとりひそかに創りあげてきた世界に触れて、その世界観が今じんわりと肚のなかでふくらんできている。